

水牛通信

VOL. 3 NO. 12
毎月1回・10日発行
定価 200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

水牛楽団タイ日記

2

ラムカムヘン大学にて

戸島美喜夫

13

印刷、漫画、クロントイの子どもたち

平野甲賀

15

スチャートさんのはなし

25

水牛泥棒の話 テプシリー・スークソパ

28

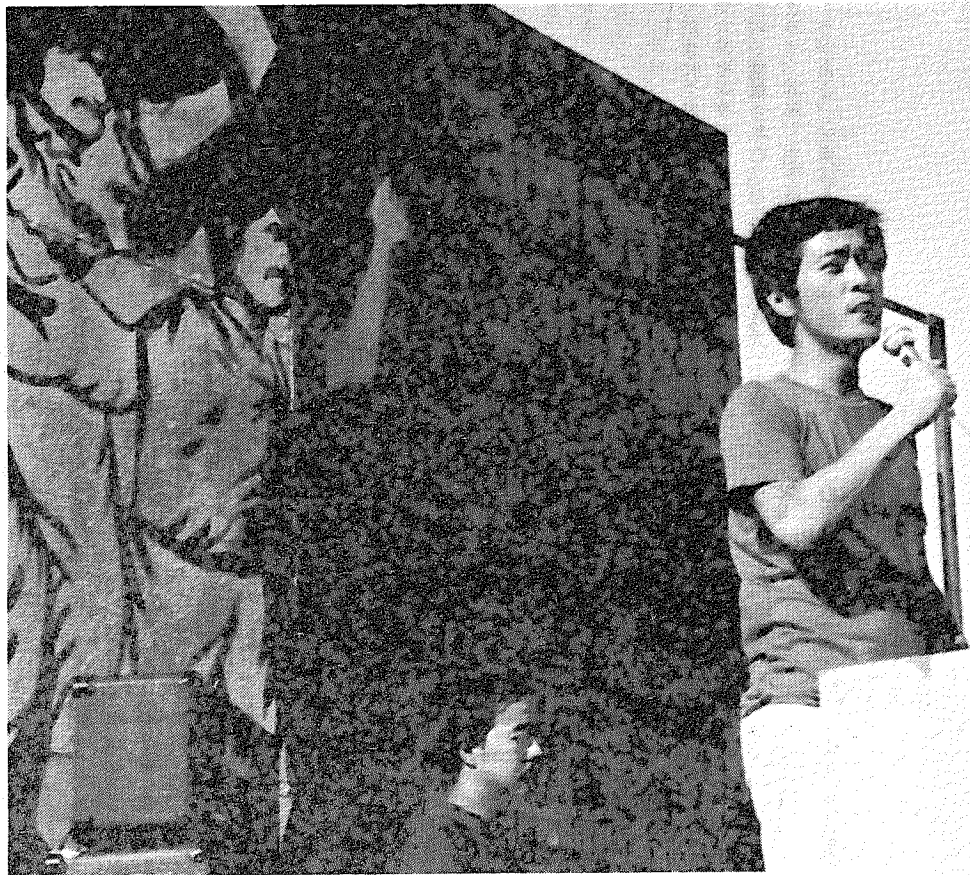
プミサックと魯迅 タウイープウォンさんに聞く

30

水牛楽団タイ日記



十月六日 朝七時、タマサート大学に行く。一九七六年のこの日、この校庭で百人ちかい学生たちがごろされた。「血の日曜日」——その五周年の追悼集会である。昨晚バンコックにいったばかりで、たちまちタイの歴史のまっただなかに放りだされた感じた。
サッカー場に面した校舎の片隅に、すでに黄色い衣の坊さんが三十人、遺族や友人、学生活動家たちが百五十人ほど、あつまっている。水牛楽団もかれらにまじって、赤い敷物にすわりこむ。読経につづいて、二十大学生連合会、社会党や新勢力党の代表たちがあいさつ。火焰樹の並木。そのかげに秘密警察員のすがたが見えかくれする。



チャオプラヤ河にのぞむ学生食堂で朝食をとりながら、学生たちと打ちあわせ。
今日から十月十四日——一九七三年の学生革命「血の日曜日」の八周年記念日までの九日間、「十月の英雄たちを記念する」連続的なもよおしがもたれる。水牛楽団もそのいくつかに加わることになった。校舎にはまだたくさんの弾痕がのこっている。文化団体の部屋をたずね、伝統的な楽団や影絵芝居の人形などを見せてもらう。

午後、バスでラムカムヘン大学へ。日射しがよくなるのを待って、四時すぎから集会がはじまる。千人ほどの学生が校庭にすわりこみ、そのままで水牛楽団の初演奏。「人と水牛」の前奏がはじまると、すかさず大きな拍手がおこる。学生たちのかけあい漫才がべらぼうにうまい。

集会のあと、二十大学生連合会の人たちの招待で会食。

十月七日 宿舎(ムアンボン・ホテル)にちかい盛り場シヤム・スクエアに、雑誌「文学世界」の編集室がある。昼まえ、そこで編集長のスチャートさんのお話(別掲)をきく。

「森」をでたカラワシ・バンドの消息——雑誌の最新号でリーダーのストラチャイの詩を集めている。一階と二階が大きな書店になっていて、なかなかの活気だ。

四時に宿舎をでて、郊外の新興住宅地にあるバイヤット家をたずねる。以前、留学生として日本にいたバイヤットさん、いまはタマサート大学の経済学部でおしえていますが、かれの家にあつまっていたのはラムカムヘンの学生たち——北部タイからバンコックにきている連中だった。

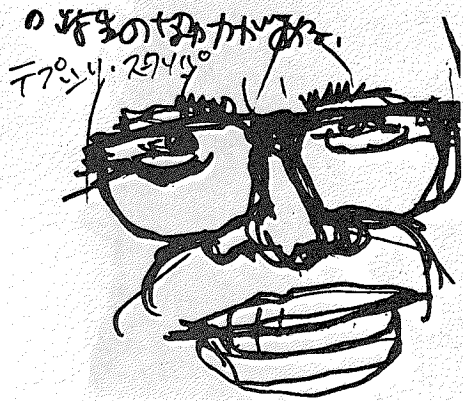
かれらが何時間もかけて準備してくれた北の料理を、庭にしいたマットの上で食う。辛い！メコン・ウィスキーの水割り。学生バンドの連中が楽器をもちだす。オコワを指さきでまるめて食いながら、正調「人と水牛」をきく。水牛楽団も「めしは天」を演奏。キム・ジハの名はよく知られている。

約束に二時間おくれて宿舎にもどると、サム・センプラトウムさんが待っていた。十六で逮捕された「バンコック十八人」のひとりで、昨年、水牛通信でインタビューしたことがある。いまはあたらしい新勢力党にく

わわっているようだ。

十月八日 午前九時、市内の旅行社にあり、冷房つきの長距離バスでチェンマイにむかう。街をでて、十時六分すぎに象、その十五分後に水牛にはじめて見参。広い水田のかなたにアユタヤのパコダ。若い運ちゃんたちはカセットの流行歌をガンガン鳴らしながら、飛ばしに飛ばす。いつのまにか土の色、樹木の形が変わり、北部タイにはいる。

六時、チェンマイ着。すずしい。プレジデント・ホテルにチェック・イン。



三輪タクシーでお嬢ばたのチェンマイ料理屋へ。食事のあと、ナイト・マーケットへいく。テプシリイ・スクーンパと連絡がとれない。ふたたび三輪タクシーをつかまえ、郊外のかれの家をさがしに行く。道はしだいに暗くなる。運ちゃんともども暗闇のなかを右往左往して、ようやく探しあてる。

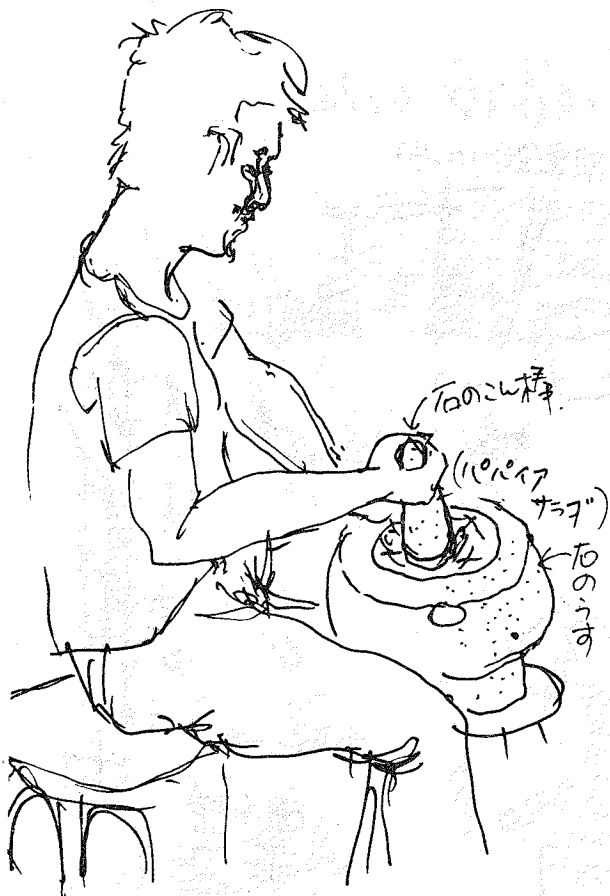
十月九日 テプシリイたちの「子ども図書館——チェンマイ芸術センター」は、いまから三年まえにひらかれた。五百坪ほどの敷地に大きなスタジオ、数軒の家がちらばっている。花の木、果物の木、薬草などなど。

午前十時、ホテルをでて、このセンターに移る。常駐の活動家ソムチャイ君、ドゥアンタさん、ルンティパーさんが迎えてくれる。火焰樹の木陰で、パイナップル、ザボン、ヤシ、砂糖キビ、バナナ、コーヒの朝食をとり、近所のウモン寺院まで散歩。

午後は三輪タクシーで観光。

①傘工場（女子労働者の日給三百円）、②街道ぞいのマーケット、③チェンマイ・ハンドクラフト（例の大山ファクトリー付属のうす

ぎれいな工芸品店、工場はストライキ中）、④ドイ・ステップ山頂のプラダート寺院（長い石段に盲目の太った歌うたい）、⑤ハーラー寺の一角、山あいの急流で水あそび。顔を白く塗った少年僧たち。ひさしぶりのピクニック気分をあじわう。



センターにもどり、水浴、買いだし、炊事など。小さな石ウスに千切りのパイヤ、干エビ、辛子、ニンニク、インゲン、レモン汁、ピーナッツ、トマト、油ジョウウユを入れ、石のキネで叩いてあえる。これがパイヤ・サラダ。夕食はほかに、ココナツ・ミルクのトリ・スープ、春雨入りのペースト風煮こみ、

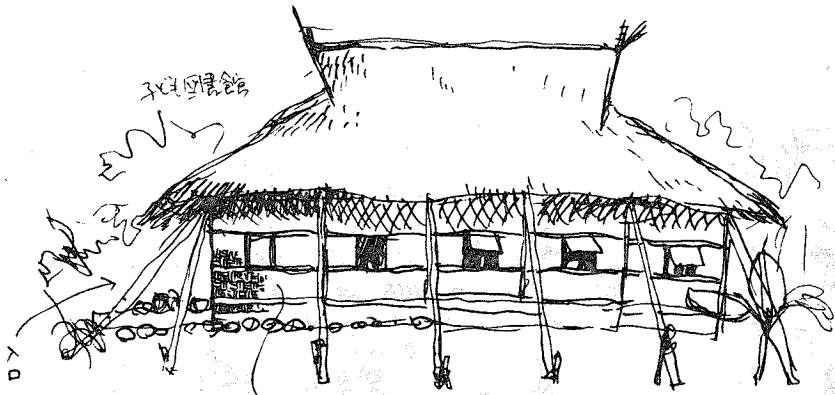
オムレツ、バナナ入りチマキなど。夕食後、テプシリイの話をきく。このセンターを中心に、かれらは県内の小学校をまわって、絵の描き方、人形のつくり方をおしえ、お話や人形劇をやってみせる。お金がとれないので、経済的には楽じゃない。全員無給。ゆくゆくは農村活動家たちのためのワークショップにしたい……。

ナイト・マーケット。民族楽器に人気が集。おそくまで歌う。

十月十日 朝食。テプシリイの水牛ばなし（別掲）に大笑い。自由行動。楽器づくりをさがしたり動物園をまわったり。

午後五時、荷づくりをして、近くのチェンマイ大学に行く。二階の吹きさらしのロビーで、「ウエルカム・マイ・フレンズ！」の手描きポスターを背に、臨時コンサート。二百人ほどの学生たちがコンクリートの床にすわりこむ。「ヨネの歌——歌の説明でナリタということばがきこえると、みんなウンウンとうなずく。

学生たちのリーダーだというチーラ・チャイ君の骨の音楽。なんというか、メガネの青



アンペラ

学生たちに送られて、午後八時、チェンマイ空港発の飛行機でバンコックに戻る。一時間の飛行。ふたたびアンボン・ホテル。

十月十一日 プンチャイさんの用意してくれた電機会社のトラックで、王宮前広場のサンデー・マーケットに行く。早くもマーケットに堪能した連中は、王宮劇場で「マノローラ」という古典劇を見る。正午、劇場まえの屋台にあつまって、ヤキソバを食う。広場のすみをゆつくりと象が横ぎっていく。大きな腹に極彩色の文字がかいてある。

二時、おなじトラックでクロントイにむかう。ホテルから四十分ほど、港の湿地帯にひしめく十数区のスラム。そのなかにある「パタナ・コミュニティ・スクール」に行く。プラーテープ先生、日本人ボランティアの福村さ

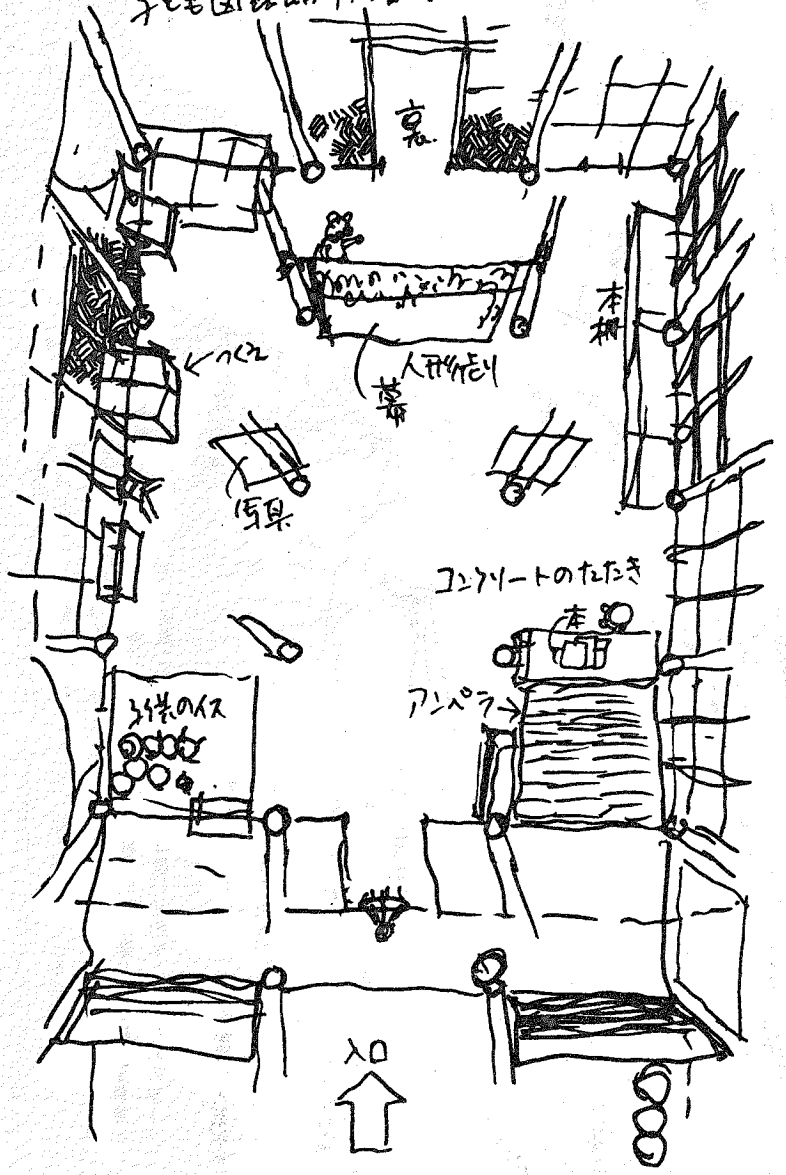
年が上半身ハダカになって、指で顔の骨をはじき、腹の皮膚をつまんで、その音で「白いハト」などを演奏するのだ。たいへんな人気。学生たちはかれがしゃべるたびに、ひっくりかえって笑う。かれは「森」に四年間いて、この芸で情宣活動をやっていた。

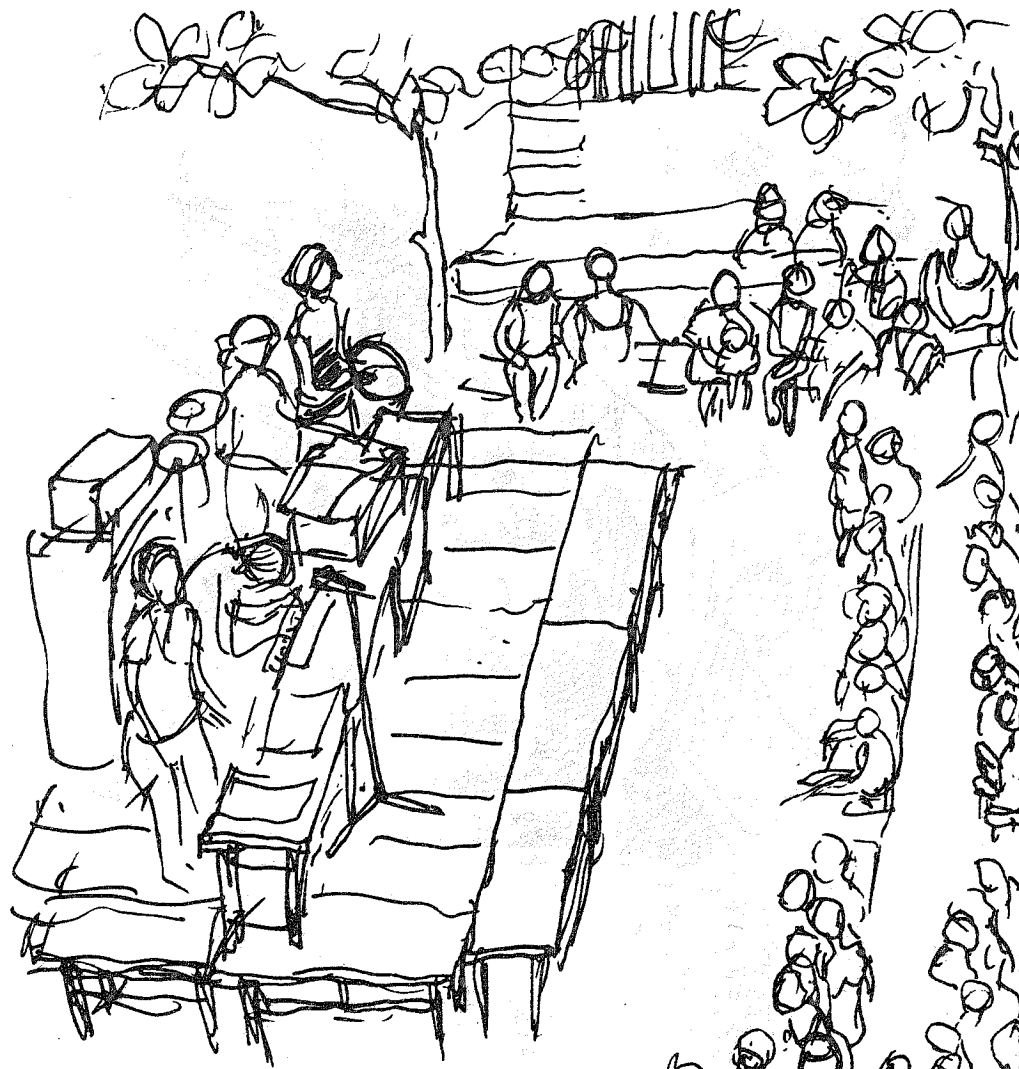
子どもたちは元気がいい。なかなか椅子にすわっていない。あたりを駆けまわり、大騒ぎなのだが、すこしもいやらしくない。肩や手首にイレズミをした若者たち。「人と水牛」は知らない。「ここに幸あり」と「三四郎」と「スキヤキ」を知ってる。スケッチする平野甲賀のまわりに子どもたちがむらがり、眼があうと親指をぐいと立てて、うまい、OK だという合図をしてくれる。

タイのスラムにおける外国人によるはじめ

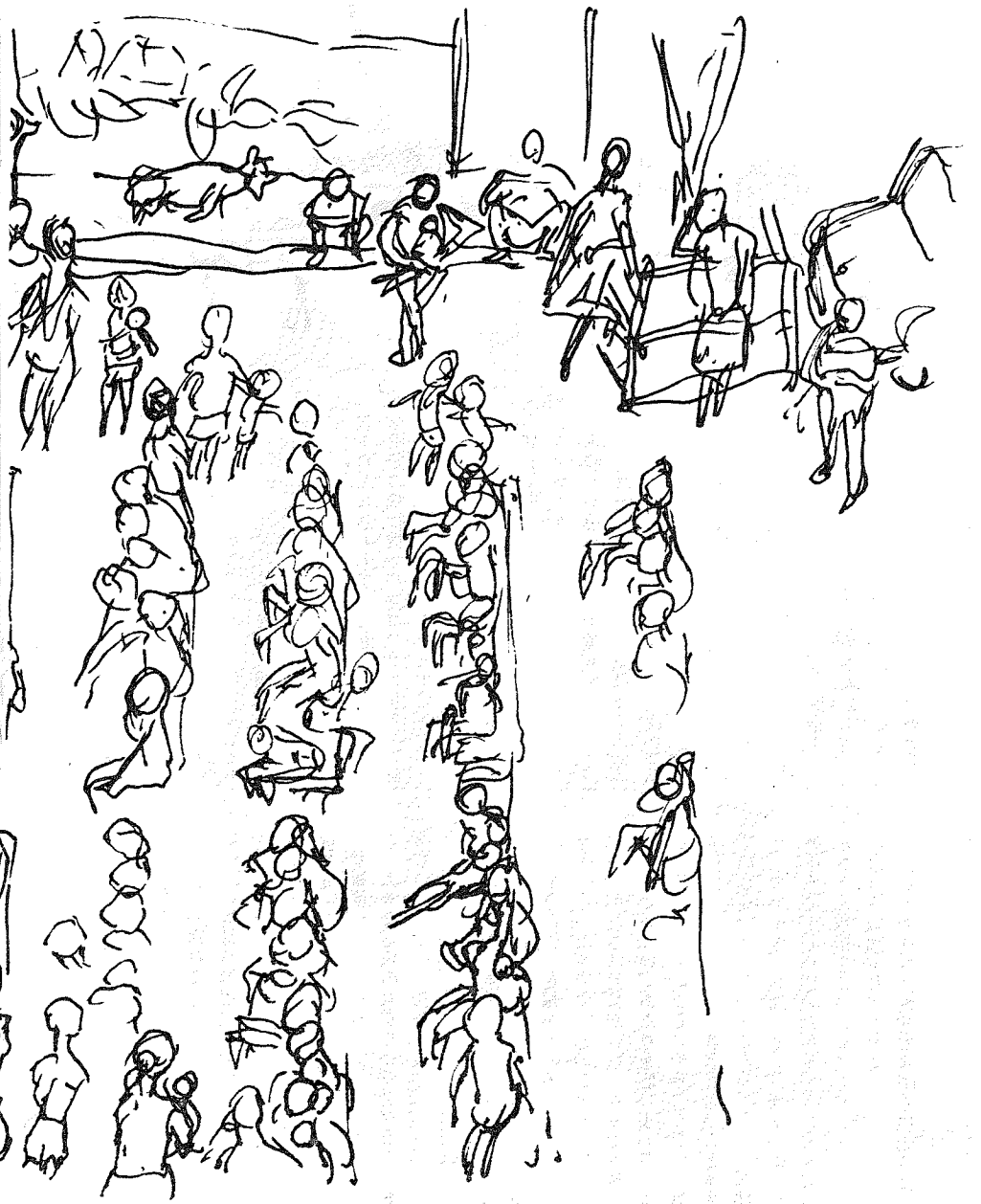
บ้านใต้ถุนสูง

บ้านใต้ถุนสูง 7 กิ่ง





10月11日 70>月・274



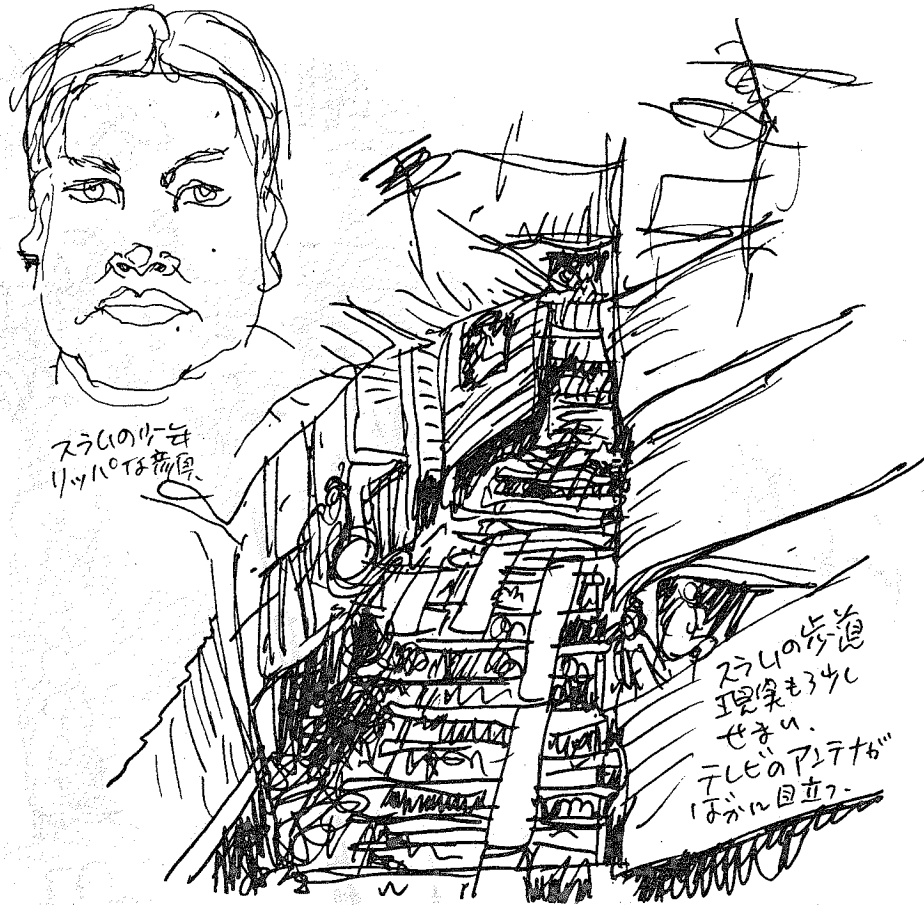
- 1時～4時 映画(労働者・農民の闘争)
- 4時～5時 バンド演奏
- 5時～7時 討論会「タイの未来」
- 7時～8時 労働者のバンド
- 8時～9時 芝居(社会学部の学生)
- 9時～9時30分 詩の朗読
- 9時40分～ 水牛楽団



話にきくタイ学生の長時間集会だ。その最後に水牛楽団が予定されているのだが、連絡がこない。二時すぎ、三々五々、タマサートの大学の学生食堂にあつまる。「血の水曜日」の虐殺現場であったサッカー場には、すでに大きな舞台がくまれ、照明機具やスピーカーがセットされている。結局、今日は水牛楽団

はなし、ということがわかった。コンサートは明晩八時すぎから。
 タマサート大学の出版部をたずね、その副部長氏の話を書く。十・六世代のひとり。もはやタイの音楽は死んだ、タイ文化は死滅したと、そっけない。辺境部の民衆芸能の研究もすんでない。レフトの音楽も、いろいろなものをミックスして中味をこくしようとしているが、音楽的にはまだまだである。
 夜、ジット・プミサックの友人だった詩人タウィートブオンさんの話(別掲)を書く。高橋悠治と中川五郎のふたりは、明日の集会の打ちあわせのため、夜中までタマサート大学にとどまる。

十月十四日 朝八時、「十月の英雄たち」の追悼集会にため、バスで民主主義記念塔にむかう。記念塔とタマサート大をむすぶ街路のほとりに小さな祭壇がもうけられ、緑と赤と青の派手なテントが張られている。五十八人の死者たちの写真。そのまわりに、二十大学の学生たちがつくった追悼パネル(絵や詩)が、続々とほこびこまれる。その文字



てのコンサートです、とプラテープさん。七時すぎ、宿舎に戻る。
 十月十二日 自由行動の日。雨のなかをバラバラに街にでる。
 (平野・津野の場合) シヤム・スクエアで両替ののち、本屋めぐり。アメリカふうのペイパー・バック本がおおい。ジット・プミサックの新しい選集も、リウスの「マルクス・フォー・ビギナーズ」も、阿久根徹夫の絵本まである。「文学世界」編集部により、タイの代表的な政治マンガ集などをもらう。アテネ劇場で「プレイボーイのおじいちゃん」というタイ映画を見る。無国籍的な青春コメディ。パンコックがカリフォルニアみたいだにピカピカに撮られていた。
 五時。ロビーでスタムさんを待つ。ついに現われず、七時解散。
 十月十三日 今日と明日の二日間、タマサート大学で「十月の英雄たちを記念する」大きな集会がもたれる。今日——十三日については、つぎのようなスケジュールを知らされていた。



を書きうつす人びと。

やがてタマサート大学のほうから、七、八十人ほどの小さなデモの列があらわれ、街路をわたって会場にはいる。青シャツの労働組合代表たち。男女ふたりの学生が黄色いローソクに火をつけ、祭壇にささげる。テレビのカメラがまわる。あつまつた人びとからちよつとはなれたところにも、インテリ風の中年女性、白い杖をついた黒眼鏡の青年などが、ひっそりとたたずんでいる。

夕方、タマサート大学にあつまる。校門のそばではガードマンたちがぎやかに談笑している。

サッカー場の仮設舞台で、四、五人の男たちがパネル・ディスカッションをおこなっていた。討論はなく、交互に少しずつしゃべるだけ。この討論が午後の一時から、あいだにフアサンというバンドの演奏ははさんで、ずっとつづいているらしい。「タイ民主主義闘争の将来」というテーマ。暗い芝生に五千人くらいの学生がすわって、スピーチに耳をかたむけている。ときどき激しい拍手。

ストリング・コンボという人気学生バンドの演奏がはじまる。原色のケバケバしい照明

がついたり消えたり、しかも電気楽器の大声響——かなり予想とちがう。ラヴ・ソング風だが、十・六を忘れるな、とか、武器はなくても戦いをつけよう、といったきつい歌詞なのだという。

九時半ごろ、あかるい満月のもとで水牛楽団の演奏がはじまる。例によって「人と水牛」で大きな拍手、ピーピーという口笛。タイの歌と日本の歌——「ヨネの宣言」や「忘れまい六・一五」や「花の歌」を交互に。

そのあと、呼びものの「光と音の冒険」がはじまる。バラエティ風のタイ学生運動史といっていたが、やはり無理らしい。正面の二枚のスクリーンにモンゴールの農民革命のスクリーンがうつしだされる。銃撃の音がひびくなかで、二台のサーチライトが構内のあちこちを照らします。そこで学生たちがごろされたのだろう。学生たちにまじって中川五郎がうたう。

集会はまだつづいていたが、さきに宿舍にもどる。これで仕事はおしまい。ロビーで乾杯。もう十二時をすぎていた。

ラムカムヘン大学にて

戸島美喜夫

バンコクにあるラムカムヘン大学はタイで一番大きな大学だという。学生数は？とたずねると、ある人は二万人程だとい、ある人は四万人位かなとこたえる。はっきりしない。まあ日大並みかそれ以上のマンモス大学といふことなのだろう。

十月六日午後三時。ラムカムヘン大学に着。朝からの快晴で大へんな暑さだ。実行委員会の本部なのだろう、柱と屋根だけの風通しのよい小屋に案内される。小屋の中は涼しくて心地よい。「こんばんは」と平仮名で書かれたタテカンがみえる。(こんばんわというにはちと日が高すぎるのだが。「水牛通信」でなじみぶかいトンバイ・トンパウさんの笑顔もみえる。学生たちを交えての交歓風景は

にぎやかだがなごやか。そして冷たい飲物と手作りの菓子とバナナの接待でほっと一息。このバナナ、まぢがってもフイリッピン産の特大型のものではなく、小さくて適度な甘味をもった真正正銘のタイ産バナナである。

すぐそばで二人の若者たちが楽器を鳴らしている。カーン(ラオスやベトナムではケーンとよぶ。笙のこと)とギターの合奏に合せ、一人が棒で柱をたたきながらリズムを刻む。細長い竹管を十数本たばねたカーンの演奏を目のあたりにするのははじめてのことなので興味津々。両手でおがむようにして楽器をはさんで、息を吹きこんだり吸いこんだりして音を出す。こまやかだがはげしい息づかいとともに器用に指をバタつかせると、ドロ

ーン(持続音)の上にメロディが蜂のように唸り、そして飛ぶ。だれの耳にもすぐとびこんでくる大道芸人の音楽のひびきがある。「生きるための歌」をひろめたカラワン楽団もこのようなひびきと親しかったのだろう。

午後四時。いよいよ水牛楽団の出番。大学の構内にあるコンクリートじきの大きな広場が集会場だ。太陽がかたむいて日かげがのはじめて。この日かげの中に学生たちがすわりこんで水牛楽団の登場を待っている。およそ五百人位か。期末試験が明日からはじまるので動員数が少なくて残念だと、一人の学生が申しわけなさそうにいう。(いやいや、これだけ集まれば上々ではないか。)

大きな野外ステージの前面に「血の水曜日」の犠牲者を悼む花の絵、ステージ後方にはタイの国旗をうちふる若者たちをえがいた大きな看板がかかげられている。オヤツと思う。日本で日の丸をかかげるこの種の集会が一体あったのだろうか。だが、日本とはわけがちがうはずだ。この国では、国旗は「支配」や「権力」を意味するのではなくて、「大地」や「祖国」を表わすものではなかったか。かれらに確かめてみたわけではないが、そう信じてまちがいはないはずだ。

水牛楽団が「人と水牛」を演奏しはじめた。タイでの初演奏だ。前奏がおわって福山さんの第一声と同時に大きな拍手。だれもが知っている歌なのだろう、途中からタンタタタンという手拍子がくわわる。「人と水牛」のよな歌が外国語でうたわれるのを聴くのはタイの人々にとって、きつとはじめての経験にちがいないはずだが、異和感はまだでなさそう。水牛楽団の楽器の音色がタイの音に似ているせいもあるかもしれない。ケーナはクルイ、大正琵琶はチャケー、ハーモニウムはカリンといったところか。

英語でひとこと。「はじめてタイにきて、タイの歌を演奏するのは大きなよろこびです。あなたがたの国タイのカラワン楽団やガンマチョンからまなんだこれらの歌を、われわれは今日あなたがたのところにもち帰ったのですから。」

タイの歌がつづく。「雨をまつ稲」と「白いハト」。福山さんは一節をタイ語でうたった。一曲うたって気になったのか「ぼくのタイ語わかりましたか」とたずねる。みんな笑う。ちゃんと通じているのだが、どこか発音がおかしいらしい。

つぎにチリの歌、ビクトル・ハラの「宣言」。「もち帰ったうた」ではなくて「持ってきたうた」ということになる。この歌についてはとくにいい解説と歌詞の意味を天野さんがタイ語に通訳してつたえる。私は聴衆の一人として座りこんでいたから、学生たちがこの解説をたいへん熱心にききとろうとする態度がよくつたわってくる。

ここで、水牛楽団に同行した若いフォーク歌手の中川五郎さんがステージにあがる。中川さんはギターがたりでアメリカの反戦歌と自作の歌をうたった。歌っている最中に拡声装置のトラブルがあつたが、かれは肉声

でうたいつづける。中川さんの歌もうけた。実行委員会から、来週のタマサート大学の集会でもう一度聴かせてほしいと強く希望されたくらいだから。

三人の男子学生が登場。かけ合い万才のように入口で小気味よいやりとりをして聴衆をどつとわかせる。何をいつているのかさっぱりわからないから、隣の学生にたずねると、水牛楽団の紹介をしているのだという。そういえば「スイッグユウ」ということばだけがとびぬけてよくきこえてきた。親しみをこめた即興寸劇の歓迎の辞なのだろう。

そして後半。水牛楽団は日本や韓国の歌を演奏。「帰ってきた歌」ではないから、さすがに手拍子の参加はないが、そのまま動かずにきいている。

司会が「タイにきた感想をひとことどうぞ」。高橋さん「はじめてタイにやってきました、タイについて知っていることと知らないことが一緒になつて複雑な感じです。」

午後五時。いつしか日かげが広場をおおっていた。そして、集った人たちが日かげを埋めつくしていた。千人は超えていただろう。

印刷、漫画、クロントイの子どもたち

平野甲賀



サイアム・スクエアからホテルへ帰る途中の大騒ぎの交差点を、トラックやバスや、タバタ走りまわるタイハツ・ミゼットのタクシーをよけながら、大汗かいて渡りきると、「シルク」という英語が目にとびこんできた。どうせこれも、タイ・シルクの土産物店だろうと、見すごすとこだった。事実、場末とはいえ、ぼくらの泊ったホテルのまわりにも、シルクや宝石の店が「どうぞいらっしやいませ」などと日本語で書きたてて、商魂たくましいところを見せていたからだ。

タイではタオルが手ばなせない、余人は知らず、ぼくはハンカチなどという体裁ではすまされない。この気温で、もう冬の季節に入ったなんて言われても、こまってしまう。連日、三十度は、ゆうに超す猛暑である。

というわけ、大騒ぎの交差点をやりす
して、ほっとひと息、汗をぬぐったおかげで、
シルクの次に、スクリーンと読めた。とその
下段には、広告の相談に応ず、というような
意味のことが書いてあるのだろう。土産物店
にしてはうすよごれている。そうだがこれはシ
ルク・スクリーンの材料店だ、もしかしたら
店の裏には工房があるのではないだろうか。
ウインドウにベタベタはられたキリヌキ文
字ごしに店内をのぞいてみた。しかしこの文
字はなんだ、シルクで刷ればいいのに、しか
し、バンコクでは、これが流行らしい、チェ
ンマイに行くため、バスを待っていた旅行案
内所のウインドも、この手の、蛍光色のキリ
ヌキ文字が貼ってあった。外はピーカンの天
気、店の中は暗くてわからない。まよ、恐
る恐る、ドアを押してみた、誰れもない。
店内の西側の棚にはズラリとインクの罐が
みあげられている。床にはスクリーンをは
る木枠がたてかけてある。あんまり大きいのは
ない、その他に印刷用の道具が見あたらない
のは妙だ。キヨロキヨロ見廻していると、
いきなり、奥の小さなドアが開いて、男が顔
を出した。そして、何ごとかタイ語で叫んで、
手に金槌のようなものを持ってふりまわして

小さな鉄格子の扉がついていてその中が事務
室、右手が編集部になっている。

この本屋さんでは、「文学世界」という月
刊誌を出版している。編集長のスチャート氏
にインタヴュー、ことばのやりとりは、もと
より高橋悠治たちにかまかして、ぼくはもつと
興味のあるものを見つけた、編集長とスタッ
フのいる小部屋の入口のところで、二人の若者
が働いている、実に版下を作っているのではな
いか、ぼくもブックデザイナーであると、さ
っそく名のりあげた。

ジラバット・アンソマリ君とアシスタン
トである。月刊誌だけだと思つたら、ほかに
ペーパーバックも出版しているということだ
ちようど出来たの「カモメのジョンナサン」
のデザインを見せてくれた。完全版下で、ト
レーシングペーパー(ぼくらがいつも使ってい
るものと、ちよつと違うようだが)をかけ、
もちろんタイ語で印刷指定が書いてある。こ
れ白ヌキ、これ赤〇〇%と、書いてあるのだ
でしょう。あれ、タイ語が読めるの?通訳して
くれた天野和子さんがびつくりしたけど、出
来上つたものと見くらべれば、わかるわけだ。
町を歩いていて、ポスターとかPOP広告
チラシのたぐいが、やたらとあるというわけ

いる、いや、どうもすみませんなどと、ぶつ
ぶつ言つて、外にとび出した。そういえば、
さつきからトントンと音がしていた、木枠を
たたいていたんだな、きつと。ああ言語障害
だな、もつと知りたいことがあるのだ、製版は
どうやっているのか、油紙の手切りかな、写
真製版も当然だろうとか。こんな町中で専門
店を出しているんだからシルク印刷の需要が
多いのだろうか。

バンコクに着いた初日の午前中に、水牛楽
団の面々と、タマサート大学の十月六日の慰
霊祭に出かけた。ちようど水曜日だ。ポンコ
ツ寸前のタクシーに乗って、あれがエメラル
ド寺院か、工事中で今は見れないそうだなと
と、いろいろ情報をしれながら、やがてタク
シーは、王宮前広場、「血の水曜日」に学
生を吊るしたというタラリンの並木にかこま
れたタマサート大学に到着。

キャンパスでは学生たちが木陰や、風通し
のいいピロティのベンチで、脇目もふらずに
勉強している。こりや、日本の大学生とは大
ちがいだなあ。——あとで聞いたのだけど、
丁度、学期試験の前だったそうだが——。キ
ャンパスをゾロゾロと案内してもらつて、あ

じやない。そこで質問してみた。ポンコクには
エディトリアルデザイナーが三十人、コマー
シャルデザイナーが十人ぐらゐいるそうだ。
これは、いい状態かもしれない、デザインが
生産者の側にあるということだ。

タイの最もアクトアルな漫画家をおしえて
ほしい。ジラバット君が尊敬し、推選するは
アルン・ワツチャラサワット、政治漫画家にし
て絵本作家、画集「ククリットが国に居坐つ
ている」を一九七八年に出版、ジラバット君
は五冊買ひしめているから、一冊くれるとい
う、感謝。なるほど、実に達者なカリカチュ
アだ。ニューヨークの政治漫画家ルリーの影
響が色濃く見られるけど、見事に消化されて
いる。

絵本のほうは、DK書店で出版されたもの
である。ある本屋の店頭でみつけたのだが、
どうも画風が同一人物の作のようだが、後刻、判
明したところによると、スワン・ワツチャラサ
ワット作で、アルンが絵ということであった。
スランとアルンは兄弟か夫婦に違いない。

チェンマイから、バンコクに再び舞い戻つ
た翌日、バンコク最大のスラム、クロントイ
で水牛楽団と中川五郎の演奏があった。ひと
わたりスラムの中を案内され、食事をごちそ

つちこつちの掲示板に、赤と緑で刷られたポ
スターが気になった。ザラツとした手ざわり。
シルク印刷だな。

民族楽器で演奏する学生バンドの部室を見
せてもらう。タイ北部の楽器であると説明さ
れ、水牛の楽員たちは、目の色をかえて、弾
いてみたり、たたいてみたりしている。その
うちに影絵に使う、例のキリヌキ人形まで出
てきて、こんな風に動かす、なんてやって見
せてくれる。これは水牛の皮で出来ているそ
うだ。へえー。興味はつきない。部屋のすみ
にやっぱりシルク印刷の木枠がたてかけてあ
った。案内してくれたポップ君が、学生ユニ
オンにはいっぱいあるよつて言っていた。だ
いぶ使用こまれたスクリーンだ、彼らはこれ
を自由に使いこなしているようだ。いささか
嫉妬にかられた。

サイアム・スクエアの中には、わりと大き
な書店が三、四軒ある、そのうちの一つがD
K書店、ちようど昔の新宿紀伊国屋と銀座の
イエナ書店をまぜたような雰囲気の本屋さん
である。中二階風なところがあつたり、あつ
ちこつち向いた鉄の階段が上下の迷路のよう
で、なかなか楽しい、最上階にのぼる階段に

うになった。言うに言われぬ興奮についてはこ
こには書かない。

スラムの小さな学校の机が急づくりの舞台
でベンチの客席は裸の子供たちで埋めつくされ、
大人たちが取り囲んだ。遠来の客たちに花輪
が贈られ、演奏がはじまった。

この旅行では、なんでもスケッチすること
これがぼくに課せられた役割なんだが、どう
もうまくこなせていない。

とにかく、小学校の二階のテラスに上つて
スケッチブックを取出すと、すでに好奇の目
を向けていた子どもたちは「おっさんなにす
んの」てな調子で、背の小さな子なんかは、
びよんびよん跳びあがって覗きこむ。しかた
ないから、皆に見えるようにすると、いま描
いているのは、誰れ誰れさんだとか、ねそべつ
てる犬を描くと、いつせいに、なんとか、と
叫ぶ、タイ語で「犬」なんて言ったんだろう。
こつちやつて言葉覚えるのいいね。スケッチ
ブックのうえに、ポタツと汗が落ちる。こ
んどは首にまいてあるタオルを指さして、拭
け拭けなことをいう、子どもたちの体温と
あせりで、大汗かいているガリバーだ。

水牛楽団、タイを語る

ゲスト 中川五郎

福山敦夫
八巻美恵
西沢幸彦
福山伊都子
高橋悠治

学生集会で演奏した

アツオ はじめてラムカムヘン大学で「生きるための歌」をうたって、あのときは緊張したね、やっぱり。感動があったね。コンサートの毎回は、「人と水牛」からはじめたんだけど……。

ミエ タイ語だね。

アツオ タイ語でうたいはじめると、一瞬、みんな「えつ、なんだ？」っていう感じだったね。タイ語だとわかると……

ニシザワ 大笑いだった。

ミエ タイの歌をうたつてもき、曲によつては、わかっているんじゃないかと思わなかった？ いまうたっているのが、あの歌だつていうことがわかんない……

アツオ 日本語にしたやつはね、わかんないんじゃないかなと思つた。でも「白い鳩」なんかは、すぐわかった。「雨をまつ稲」はアタマだけタイ語でやつたし……「村からのノート」がわかんなかったんじゃないかな。

ユウジ あれはぜんぜんやりかたがちがうからね。わからなかったらうね。

ミエ 「米のうた」も、ちよつとわかんなかったような感じだったね。わかれないと、サ

イツと潮の干くような空気になるのよ。アツオ ふーん。おれは気がつかなかった。まいあがつてたのかなア。

ユウジ そうだよ。すごい顔してるものな、写真を見ると。

アツオ こっちは思いこみがつよいからね。行くまえから、タイの学生たちの集会というものにたいしてはさ、これが話にきく……なんて思うとき。漫才、おもしろかったね。

ミエ どの集会でも、かならずあいう狂言まわしがいたじゃない。笑わせる人っていうのが、どこでもいたよ。

アツオ チェンマイ大学のチーラ・チャイト

かね、骨の音楽の。野外で、ああいうところをやつてると、気持が昂揚しかける。でも、水牛楽団のスタイルっていうのは、そういうふうには絶対になれないんだ。

ミエ もっとパーツと昂揚したかった？

アツオ うん、したかったね。

ミエ してたんじゃやない？

アツオ してたか！

ミエ あのラムカムヘンの集会は、急にやることになつたらしいのね。

アツオ 水牛楽団がくるっていうので、ブンチャイがプロデュースしたんだろ。

ユウジ かんたんなんだよ、プロデュースするっていうことが。

ミエ 日本なんかだと、連絡にもすぐ電話をつかつたりするじゃない。むこうでは、ぜんぜんそういうんじゃない。人づてにいくから、わりとかんたんにいくのね。

アツオ 前日とかき、当日になつて決まっても、やれるんだから。

イツコ ほんとにそうなのね。

ミエ チェンマイ大学も、コンサートをやることになつたのは当日でしょう。テプシリイといっしょにいると、そこにテプシリイの友だちで、大学の先生だという人が、子どもを

スクーターにつけて、ダダダダツとくるわけ。そこで立ち話をしているうちに、どうせなら大学でコンサートをやればいいじゃないかということになつて……それが当日のお昼すぎぐらいなんだもの。すぐに時間とか場所とかを決めちゃつてさ。

アツオ ラムカムヘンは何人ぐらいいいたの。

イツコ ずいぶんいたね。あんなに集まると思わなかった。

ニシザワ 千人ぐらいいいた。

ミエ はじまるときはそんなにいなかったけど、だんだんふえてきた。演奏してるときはわかんなかったけど、あとで写真を見ると、ステージのうしろに大きな絵があつたのよ。旗がたなびいてる、かんたんな絵。それからステージのまえに、法要のときもあつたけど、おそなえのポスターみたいな絵をみんながつてきて、ならべてあるの。

ニシザワ 花輪のかわり。

ミエ そうそう。すごくきれいだったよ。そんなことも、よく考えてるのね。

アツオ 演説はあつたっけ？

ミエ うん。何人かすわつてさ……

ゴロー シンポジウムみたいなので、詩を読んだりしてた。

ミエ シンポジウムっていつたって、べつに議論をしたりするんじゃないのね。順々にしゃべるだけなのね。

アツオ 自分の番がおわると、帰っちゃう。

ミエ ただタマサートの集会はちがつてたわね。あれはそうとう準備して……こ何年間かでは、いちばん大きな集会なんだって。

アツオ 五千人ぐらいいいかな。

ミエ 暗くて、よく見えなかった。それに、みんな静かなのよ。だけど、べつにおとなしいっていうわけじゃないのよ。うしろのほうはビクニツクみたいに丸くすわつて、ベチャベチャしゃべりながら……

アツオ だけど、ステージの上にミラーボールをつけたらして、いまはああいふ傾向なのかな。

ユウジ だんだんそうなつてきたんじゃないかな。「テクノロジーの進歩」だよ。バンドがでると、明りを消して、スクリーンのうしろにある明りをつけるわけよ。そうするとバンドがシルエツトふうに浮きあがつてさ、きれいに見えるわけなんだけど。

ゴロー すごく暗かった。

ユウジ 強力な照明がないんじゃない？ 三日はとくに暗かったな。「あしたはもつと

光度のつよいやつをもってくる」といってたけど、それにしても暗かったね。

アツオ だけどき、フルに明りをつけるというの、いちどもなかつたんじゃない？ 客席のなかの正面のヤグラから二本、明りがくるんだけど、両方いつべんにということがないんだな。

ミエ 光量がダメなんじゃないの。

ニシザワ なにしろ譜面が見えないんだ。

アツオ コンサートはぜんぶで……そうか、四回だけか。

イツコ でも、最初は十四日に一回だけということだったんだから、ずいぶんやったよね。いそがしかったね。いろんな人に会えたけど、なんだか脈絡がわかんなくて。

アツオ われわれのまえにやった「ストリングス」という学生バンド——いまいちばん人気があるっていつてたね。

ユウジ 何人いたっけ？

ゴロー シンセサイザーとキーボードとドラムとベースと……

アツオ ギター二台と……

ミエ 歌手が男女ひとりずつ。あとは詩みいたいのを読む——あれはもう卒業した人なんだってさ。

ニシザワ 歌詞はわかんないんだけど、どの曲も感じが似てるんだよね。

アツオ イントロがかならずハードで、これはギンギンのハード・ロックかと思うと、中味はやさしい、のんびりした感じで、イントロと中味の曲想がぜんぜんちがう。

ゴロー リズムをかえたりね。かなりプログレッシブな感じをめざしてるみたい、間奏とか、シンセサイザーのつかい方とか……

アツオ ぜんぶ政治的な歌なんだってね、はっきりした主題をもってる。

ユウジ これらの楽器を見たけど、鍵盤た鍵で、すごく大事にしまってるわけ。それで、やっぱり壊れてるんだよ。それをなおすといつてさ、コンサートのときはもうなおっていたね。自分たちでなかをあけて、なおすんだね。十年くらいまえの楽器という感じだね、あれは。

ゴロー クロントイにいったとき、福村さんのやつてる電気の技術をおしえるところにいる——いくつぐらいなのかな、十七、八歳ぐらいの青年で、イレズミなんかして、すごくいかついやつなんだけど、ギターをひくのがすきで、いろいろきいてくるの。おまえは日本人なのに、なんでヤマハをつかわないのか

とか、すごく詰問されるわけ、ぼくはアメリカ製のギターをもつていつてたから。これらにしたらヤマハっていうのは憧れのまどで、

一般には日本のカワイとかスズキとか、そういうギターがはいっていて、かなり高級品という感じなんだね。「そのギターはいくらか」とか、ねほりはほりきかれて……

アツオ いいにくかつたろう。けたたましい値段になっちゃうものな。

ゴロー やつぱりアメリカの曲とかが、すきなんじゃないかな。

イツコ アメリカのフォークソングね。チェンマイ大学だつて、ゴローさんがピート・シガーの「虹の民」なんかをやると、学生さんが眼をかがやかせてきいてたね。

ミエ アリスのTシャツを着てるの、いつぱいいたじゃない。

ゴロー いたね。アリスはタマサート大学でやつたんでしよう、わりと最近。

正調「人と水牛」をきいた

アツオ クロントイの青年たちは、「人と水牛」は知らなかったみたいだね。学生たちはみんな知ってたけど。だから、すごい断層が

あるんだな。

ミエ 大学というのはすごく特殊などこなのよ。

ニシザワ タマサートとか、みんな国立なんですか？

ユウジ 共通一次みたいな、全国いつせいの試験があるわけね。その成績で、どこの大学にいくか決まるんだって。いちばん上がチュラロンコン、二位がタマサート、三位がカセサート、四位がチェンマイなんだって。

ニシザワ ラムカムヘンは？

ユウジ あそこは無試験で、だれでもはいれるわけ。

アツオ だから学生のかずなんかでも、でたらめいつてたね。

ミエ 四万とか、十万とか……

アツオ 百万とかね。

イツコ 高校生みたいな女の子が歩いていたり、空気がぜんぜんちがうわね。

ミエ 四年制なんだけど、四年で卒業する人はほとんどいないんだって。アルバイトをしながらかようもんだから、最高は八年間いられるんだけど、それでもダメで、また一年からやりなおすっていう人もいるらしい。

イツコ あたし、ラムカムヘンのTシャツを

着て、デパートのなか歩いてたらさ、売り子さんがきて、「あなた、ラムカムヘンの学生ですか、あたしもそうなんです」って。

アツオ 辺境からきた、少数民族の学生だと思っただ。

ユウジ 共通一次の成績によつて、全国どこの大学にもいけるから、ある地方の出身者がかたまつて、異人会みたいなのできるわけよ。ええと、北と東北と南か、そういう地方別があつて、風俗なんかもぜんぜんちがうもんだから、それぞれに自治会じゃないんだけど、組織をつくるわけね。で、そのなかにそれぞれの地方の音楽をやる連中がいて、それがクラブをつくつてさ、そこからバンドができる。最初の日にタマサート大学で、部室

みたいなとこにいったじゃない。あれは南のバンドだつていつてたね。

アツオ バイヤットさんの家にきていたのは北だつていつてたな。地方からでてきて、むかしは就職できてもできなくても、そのままバンコックにいつちやつたんだけど、このごろは大学をでて、また北なら北に戻る人たちがふえてきたんだつてさ。

ユウジ あそこにはいたバンドのリーダーが、チェンマイでたづねてきた。かれは卒業して、

北に帰ったわけね。弁護士見習いつていったかな。弁護士つていうのも、すぐなれるみたいなんだよ。司法試験なんてないんだつて感じだつてたよ。要するに、弁護士ができればいいんだつて。それで、みんな刑事も民事もやるんだつて。ただし刑事のほうがお金になる。そういうしごとをやつて、あいまに音楽をやる。

ミエ みんな、ホラ、学生バンドだから、卒業したらどうするのつてきいたら、やめちゃうか、あとは政治的な組織にはいるかしちゃうんだつて。高校生のバンドがいたでしょ。ああいうのが毎年、いくつもできるけど、人氣がでなかつたりして、やめちゃうのね。

ゴロー ぼくも「学生か？」つてきかれたでしょ。こういう音楽をするのは学生だと思つてるんじゃないかな。「プロだ」というと、ふしぎそうな顔をした。

アツオ バイヤットさんのとこで、かれらがうたう「人と水牛」をきいてからさ、自分が大声をだしてうたうのがみつともないつていうか……かれらは非常にかるい感じで、やわらかく、流れるように歌うんだ。あれからうたいにくくなつて困つた。声のどかいほうが勝つという感じがさ、なんとたくアンバイわ

るという気がしてきちゃうんだよね。
ミエ しゃべるときでも、ちっちゃな声でしゃべるのよね。

ニシザワ あんまりお酒ものまない。
ミエ だからお別れしてから、あたしたちだけでお酒をのむという毎日だった。

アツオ お金がないんだって。タバコにしても、タバコを買うお金があれば、学生食堂でオンパが食べられる。

イツコ そうよね。食事が百円ぐらいなのに、ビールが四百円だもの。
アツオ ビールをのんでも、タバコをスパスパやっても、気がひける。

ニシザワ タバコをすってたら、お金を燃やしてるっていわれた。

アツオ でも、水牛楽団はどういうふうにくいとめられたのかな。なかなかそういう話にはならなかったね。

ミエ ほめられるいっぽうで……。むこうの人にしてみれば、そりゃあ、わざわざ歌をうたいにきてくれるのはうれしいけど、水牛がどうしても必要だというふうには考えていないと思う。運動という面でも、私たちの側が必要としているんで、むこうはむこうで充足したやり方でやってるんじゃないかな。そう

器……

ユウジ ピアノの先祖よ。

アツオ それを買った。一七〇〇バーツ。それからスン。スンはこれ、ギターだね。

ニシザワ ウクレレとギターの合いの子ね。

ミエ あとはみなさん、胡弓を買った。

アツオ ぼくは買わないよ。ユウジのときは胡弓とスン……

ユウジ それから象の首につける鈴というか、木の鳴子。

ミエ ウチで買ったのは象のだけど、いっぱいあるのは水牛ののね。だいたいは観光用なんだけど、これはそうじゃないって、ヒトミちゃん（ドゥアンタ嬢）がいつてた。チェンマイのナイト・マーケットで買ったの。

ユウジ バンコックのサンデー・マーケットでも、楽器あった？

ミエ 楽器のコーナーがあったって。あそこはいろいろ分かれてるのよ。犬から猫から売ってるよ、アヒルから。

アツオ まんなかで、ふしぎな芝居みたいなのをやってたな。呪術というか、女の子が地べたに寝てて、その子を……

イツコ スピーカーで雑音入りの音楽を鳴らしてるのね。

いうことをふくめて、いざ行ってみると、むこうの人たちの説明できないものがわかってくる。いままで抱いていたイメージとはぜんぜんちがってきちゃうからね、帰ってきてからの報告のしかたも……よくある報告のやり方っていうのはちよつとまずいんじゃない？

ゴロイ ぼくは引き裂かれてましたけどね。ミエ あたしはすぐく居心地がよかった、日本にいるよりも。

ゴロイ 日本語でうたうから、ことばが伝わらないし、自分のやってるスタイルがアメリカのフォークソングのものだから、なんでここでそういうのをうたっているのかというふうに、うしろにひつばられる気持と、その反対に、ギターでやるかたちの有効性を再認識して、もっとやってみようという前になる気持と……引き裂かれた。

ユウジ だったりひっこんだり、いそがしくやってたわけだ。
ゴロイ むこうの大学生とか若い人たちというの、ぼくらとおなじような外国音楽にしたいんでいて、それを自分の音楽のなかにとりこんでる。そういう点では、日本からいった自分にもつながれるなっていう気がした。

イツコ 集会なんかで演奏しても不自然じりしゃべるときは消してて、ひとときりしゃべると音楽——ひとりやるんだ。

ニシザワ 見世物だね。
ミエ ぼら、チェンマイのマーケットで楽器を売ってたおじさんの話をしたら？ あそこでは、あの人しか売ってないんだって。自分でつくって売ってるのね。演奏が上手なんだもの。いっぱい並んで、どれをとってもすぐく上手にやっちゃうんだもの。

ユウジ そう。だからみんな、自分でもできるような気になって買っちゃうところが、ぜんぜんダメなんだよね。チェンマイでは、楽器づくりをさがして歩いた。ひとりはおうオジイサンで、からだをわろくしてやめるといいう話だった。古典音楽の楽器つくりなわけ。われわれが買ったようなのは、村の衆の楽器だからダメなわけさ。で、立派なのをだしてくるんだけど、これは音がでないね、やっぱり。中国風の胡弓なんだけどさ。もう売ってもないのね。

ミエ 見せてくれるだけ。
ユウジ 家にあがりこんで見せてもらったんだけど、帰りがけに、そのオジイサンが弾いてる音がきこえてきたよ。

アツオ 刺激されたんだ。

やないのね。日本でやっていると、自分のいる位置がうまくみつけれないところがあるんだけど。

楽器をさがし歩いた

ミエ 楽器の話をしようか。みんなおなじようなものを買ったもの。私有したいのね。自分のものにして、家に帰れば……

アツオ もう見むきもしない。

ニシザワ ぼくが買ったのは、ピーモンというオーボエみたいなので、リードがついてる。それからピツポンは、ミエさんが買ってきてくれたんだよね。中国の笛にちかいんですよ。

アツオ ぼくはキム。

ユウジ タイではキムだけど、おなじようなのが世界中にあるよね。ツェンパロンだろ。イランのサントウルだろ。中国ではヤンチンだし、朝鮮にもあるよな。

アツオ どこかでダルシマっていうね。アメリカでマウンテン・ダルシマというのは細長いやつ。要するにキムというのは、箱の上に弦が四十二本、横にはってあって、その途中をコマで高くして、パチで叩いて音をだす楽

ユウジ そうそう。いい音でやってたよ。もう一カ所、胡弓をいっぱいつくっているおじさんがいて、あの裏側がライオンの顔みたいになってるじゃないさ、あれを彫っていた。そして三番目にいったのが、マーケットにきてるおじさんで、縁台の上で昼寝をしているわけよ。だから、いろんなものがあるんだよ。そのなかで、「これは家具じゃない」といわれたのを買ったの。値切っても、家具じゃないからあまりまけないわけさ。

ミエ ほかのものは値切りたおすんだけど、みんな楽器だけは、わりと言いい値で買っちゃうのね。
ユウジ スンはね、帰ってきてからなおしたんだよ。

アツオ へえ、そう。
ユウジ 弦はね、自転車のブレーキなんだって。だから糸巻きと弦は、ギターののにつかえてみたけどね。複弦はやめて単弦にしてき、そうするとピンという楽器になるというんだけど、そのへんがよくわかんないんだよ。弾き方がちがうわけね。

ニシザワ 小泉文雄さんの家には、ぜんぶあるだろうな。
ユウジ 冷房のきいた戸棚のなかにな。小泉

さんはひととおりできるんだよ。旦那芸という感じでき、ホイホイホイとやってき。どんな話がそれちゃうけど、ベトナムの音楽学者でチャン・バン・ケイという人がいたのよ。それがじつに旦那芸の人で、ベトナムの楽器一式を背中にしよったり、腕にかかえたり、眺みたいに持ったりして、楽器だらけになって講演にいったら、琴みたいなのや三味線みたいなのを、ポロンと弾いては、ひと声ずつ歌ってみせるんだね。そういうのとちよつと似てるね。

ミエ 本も買ったわ。

ユウジ 読めもしないのに……ジツト・プミサク、全集ができるくらい買って。

ミエ 一行訳したら、もうわかんないからやめちゃった。

ニシザワ 福山さんはタイ語の初歩の……あれ、もうずいぶんいったでしょ？

アツオ う、うん。

ミエ それから、バンコクで私たちが泊ってたところ。最初に入国するとき、入国管理のおじさんが「どこに泊るか？」ってきくわけよ。「ホテル・ムアンボン」と答えるんだけど、そういうホテルはないっていうの。「ラマー一世通りにあるのだ」といってもダメな

のよ。

アツオ ホテルじゃないんだね。

ゴロー ムアンボン・ビルのロッキング・デパートメントなんだって。

ユウジ 経営者が中国人で、ウイスキーを輸入してホテルをたてようと思ったけど、ホテルの免許がとれなかった……

ミエ このような設備では、とてもホテルとして認可するわけにはいかない……

ゴロー 非常口なんかないんだものね。

ニシザワ ネズミなんか元氣だったし、ゴキブリもツヤツヤしてたね。

ミエ 日本人は泊らないんだってき。

アツオ いや、出稼ぎのボクサーがいたよ。懸賞かせぎにきて、負けちゃって、まだ当分のあいだいるっていった。

ミエ 西アジアの人たち。

ゴロー すぐそばにナショナル・スタジアムがあるから、地方からきたスポーツマンみたいな人たちがいたね。

ミエ あそこは長逗留できるのよ。ドアの外に靴をぬいでる人もいた。暮してるんじゃないかしら。だけど、設備がわるいなんていうのもさ、日本ですんできるとそんなに大差ないわよね。

アツオ ウチよりチャンとしてるよ。ところでき、もつと大状況の話はないのかな。われわれがいったとき、そもそもタイはどういう状況だったの？

ユウジ 帰ってきて何日かしたら、バンコクで戦車がたというニュースがあったら。アツオ そうそう。よくわかんなかった。

ムウジ 調べてみればわかるはずだよ。AMPPOにでてるよ。

ミエ プリンセスが婚約したとかき……

イツコ あのあとアメリカにいったんだって。そこでギターひいて、フォークうたって、すぐうけたって記事はどこかで見たんだ。

アツオ 大状況を話してもおなじことになっちゃうなア。

ユウジ AMPPOなんか見れば、なんでもわかるような気になるじゃない。でも、いってみると、なにもわかんない。むこうでも、みんな、どうしようかというんで、いろいろなことをやってみてるわけ。ところが日本からだと、スカットわりきれて、みんなある方向にむけて努力してますということになってる。そういうことがこわいんだよな。

ミエ 大状況でございました。

スチャートさんのはなし

タイ自身の外交政策が自立していないかぎり、ベトナム国境に危機がおこるのは当然のことです。タイ政府がベトナムに敵対する態度をとってきたことに問題があります。たとえば、国連の総会でプレムがいったことに対してベトナム代表が席をたつて出ていくというようなことは、ひじょうにまずいことだと思ふ。双方で軍備の用意をしているのも、交渉による両国間の外交関係にとつてまずいことです。将来ベトナムがタイを侵略することはないとわたしは思いますが、それぞれ現状がかわる可能性のある未来のことですから断言はできません。

ベトナムが自国の必要性からカンボジアを侵略したのは、いいことではないでしょう。

それによつて、カンボジアで戦争をおこさざるをえなくなつたのですからね。だからといつて中国が教訓のための戦争をしかけるといふのにも讃成できません。こういう事態は、この地域の社会主義そのものの危機だとわたしは考えます。社会主義陣営の中のイデオロギーの矛盾・対立を生んだのです。

それから中国はこれまでにさまざまな国や人を修正主義呼ばわりしておきながら、結局自分を変節し、世界政治のひのき舞台に上つてきてアメリカとつきあうようになった。それにはそれなりの理由があるでしょう。しかし、自分をマルクス主義者だと考えている人や、マルクス主義運動にかかわってきた人はひじょうに疑問をもっています。

ベトナムの侵略も侵略だが、ポルポト政権のしたことも社会主義ではなかつた。それは革命家にとつても大きな教訓です。革命家といつても、人間性をもつた革命家ならば考えなければならぬ大きな問題です。以前はポルポトを支援する人が多かつたのですが、最近はかわつてきていますよ。この問題の複雑さ、むずかしさを認識しはじめてきている。ポルポトの政策はまちがつていたとわたしも思います。ひじょうにおかしい。

中国は、カンボジアをずっと支援してきたので、ポルポトが権力を失えば、なんとかなければならなかつたのが現実ではないか。中国もベトナムとの間に矛盾をかかえているのです。タイ自身がどうするべきかというこ

とをいえば、中国にあまりかたよってもしけないし、ベトナムは敵だと考えるのもいけない。中立であるべきです。カンボジアの人たちは、カンボジアのことは自分たちでできるべきだと知らされるべきです。

難民のことについていえば、わたしは難民問題は純粋にヒューマニズムの問題だと考えています。彼らは一時的に戦禍をのがれてきていても、それがおさまれば帰っていくべきで、またはほかに行きたいところがあれば行けばいいのであって、殺しあいのないことを望んでいます。

カンボジア人の難民は、ポルポトの悪政と、そのあとに続いた戦争とによっているのだと思います。ポルポトの悪政のようなものがけしておこらない保障がなくてはなりません。

タイの外交政策についていうと、かつてはアメリカ一辺倒だったが、今はかなり中国よりになってきました。このようにいつも大国のひとつにつくついているいなければならぬ外交政策は、こたえがないとおなじです。CPT(タイ共産党)もおなじような状態、つまり中国べったりなので、やはりCPTからも正しいこたえを得ることはできないのです。森の解放区から帰ってきた人たちも、それで



こまっっている。

森に行かなかつた人たちからもCPTに対する批判ができています。人民の声放送がストップしたときをごぞんじでしょう。それがきっかけになって批判や疑問ができてきました。人民の声放送がストップしたのは、タイのクリアンサクと中国との関係がきらからかになって、CPTの政策が中国よりであることの矛盾がみえてきたからなのです。今もまだ人民の声放送はストップしたままで、印刷された宣伝文書のようなものがときどき出されるだけです。都市のインテリはそれをどういうふううけいれているかといえば、やはり批判的である。10・6のすぐあとのように、全面的に信じることはなくなっています。

CPTは自らマルクス・レーニン主義の道を歩む政党だといっていったのを、みんな信じていたのが批判的になってきた。CPTは中国べったりで、自分自身の方針をもっていないというのがその批判の一番大きなものです。だからこれからの民主化運動の課題は、都市のなかでちりぢりばらばらになっている反対派を、うまく政治の場にのせようという考えがある。つまり政党法をつくって政党を組織させ、議会政治の中でたたかわせていこうじゃないかという考えです。たとえば、共産党は今非合法ですが、それを合法政党として議会にいれ、これまでのような武力弾圧でなく議会をやつたほうがいいという考えも軍の中から芽ばえてきているのです。

こういうことが実現できれば、タイの政治も民主化されるとわたしも思います。そうすれば、農村が都市を包囲するというような、中国式の方法論を用いたたかう必要もなくなるでしょう。ところが、共産党を合法化しようという法案がでてもおぼされてしまう、農地改革法案を提出してもつぶされてしまうという状況がある。

これから都市で活動していこうとするものは、CPTがどれだけ自己変革できるのかをみていかなければならないと同時に、政治を軍事に優先させる今の政府の政策がどれだけ効を奏するかもみていかなければなりません。政治を軍事に優先し、以前のような極端な右翼とはちがうかたちをとりはじめているのでブレムのような対して、たくさんの若者が解放区から都市へ帰ってきたのです。ただし、これは政府の政策が効を奏したのと同じで、CPTに内部的矛盾があるからというも重大な事実です。

新世代といわれる作家のなかで、社会問題とくに貧困、社会的不平等、社会正義などをあつかってきた人たちは、10・6のあと沈黙しました。その後でてきた作家もおなじような問題があつかってはいるが、表現方法が変わってきています。プロパガンダ文学といってもいい、ストーリーのできあがったもの、農民が貧困にたえかねてたちあがったが、弾圧されてCPTに合流するとか森に入るといような内容はかげをひそめ、そのかわり表現方法が洗練され、文学的芸術的に高まった。用意されたストーリーにそって小説を書くこと

いうのではなく、現実のあるがままの姿をそれぞれのみた目で表現していくという新しいひとつの段階をうみだしているのです。社会問題に対する関心はほとんどかわっていないけれど、社会主義リアリズムに対してクリティカルリアリズムがふえてきている、これが私の考えです。

ただしそれは都市でのことで、解放区では文学の活動はへつただろうと思います。なぜならそういう新しい作家たち、カラワン、ウイサー・カンカップ、ワット・ワラカンクン、シップサム・カセートクンなどは解放区で文字や著述活動で共産党を支持する役割を果たし、いまは都市に帰ってきてしまったからです。

10・6の前の進歩派作家の書くものは、学生を含めた進歩的知識人が読んでいたにすぎず、労働者にとつては異質なものでした。彼らにもっともよく読まれていたのは「パンコク」という週刊誌で、現実から逃避する内容のものでした。農民や労働者の生活について書かれたものを読むのは、少数の活動家にかぎられていた。

10・6の前は、さまざまなグループがうまれた勃興期で、学生、農民、労働者の運動は

結びついていました。ところが10・6のあとはみんなどうしたらいいかわからなくなりました。特に学生は、自分たちでどこまでできるか、どこまでやつたらいいか、ためらい考える時期でした。しかし学生と労働者を結びつける靱帯が完全にきれてしまったというわけではないのです。10・6の前のように表だつてはみえないが、太いパイプでつながっている。労働者は今また組織されはじめています。組織は大きくなりつつあります。

農民の組織化は労働者よりむずかしいですね。農民はちらばっている。労働者のように一つの工場の中でいっしょにはたらいっているというのところが、組織化がむずかしい。10・6以前にあつたような農民組織はその後まだひとつもできていません。しかしきっかけさえあれば農民たちはかつてのような組織をつくると思います。そうなれば農民の問題のこまかい点を都市の人間にもっとはつきりさせられることができるでしょう。農村問題は解決しなければなりません。農民の抑圧された状態は、米の値段や地主の土地占拠などだれの目にもあきらかであり、都市の近代化とのギャップをますます広いものにしていくのです。

水牛泥棒の話

テプシリー・スークソパ

水牛楽団の人たちを迎えて、ちよつと水牛の話をしたと思います。

水牛はバカだといわれています。百姓はバカだ。その百姓につかわれる水牛はもつとバカだ、と。でも、水牛はけつしてバカじゃないのです。よそに売られても、お腹が大きくなると、もとの家に戻ってくる。水牛をつれて道歩いていると、雷になる。それで近所の家によるでしょう。そうすると、つぎのときもかならずその家によるんですね、自分から。こちらには「鼻輪がはずれても怒るな、歌つてやれ」ということばがあります。水牛はバカじゃない。口がきけないだけなのです。

「水牛は大地に仔をあずける」ということばがあります。赤ん坊をうむとき、どこかに

いつちやうのですね。水牛はだれも見ていないところでお産をする。だから、大地に子どもをあずけるというわけ。

愛するということは、牛にサカリがついたのとおなじで、とめてもとめられるもんじやない——という詩もあります。サカリがついたとき、メスが匂いを発する。一頭のメスをめぐつて、五十頭のオスが喧嘩をすることもあります。牛泥棒がいいますね。牛泥棒はメス牛をつれていって、オス牛をさそいだす。母親牛をつれて迎えにいくとかね。

なんで私はこんなに水牛のことを知っているのか。それは、いま私が農民の小説をかいているからです。そのために、こまかいこといろいろ調べなくてはならない。たとえば

水牛のウンコの色。雨期にはやわらかい、水っぽい、緑色のウンコをする。乾期はワラを食うから、黄色くて、かわいている。そういうことにも注意をはらわないと、いい小説はかけないのです。そのために、牛泥棒のこともたくさん調べた。五年まえには、おおぜいの牛泥棒にインタヴェューしました。

水牛は、太い竹に細い竹をくませた柵でかくつて、杭をたてて、そこにクサリでつかないでおくんです。

で、泥棒はソツと柵にちかづいて、棒で水牛のアゴを叩く。すると、すごい勢いで首をひくので、クサリが切れる。ナイフで足をつくと、柵をとびこえて逃げる。そこをつかまえる。アゴをあげさせて、無事にここにい

るぞという証候に、フンフンという鼻息をきかせる。それから音がしないように、ソマききだちで村はずれまでいって、そこであちこちひつぱりまわす。川や運河にぶつかると、まがつて逃げる。そうやって行方をくらますのです。

盗まれたほうはどうするかというと、だいたい二時ごろに盗まれて、四時ごろに気づく。そうすると村の全員が、男たちは水筒をかついで、ものすごい勢いで走りだし、女たちはゴハンを炊いて、それを竹筒につめて、男たちの後を追いかける。

まず先発隊——はじめに気づいて走りだした人たちが五十人いるとすると、かれらは木の枝をもって、その枝の部分で牛の歩幅をはかり、木の葉のほうは道にすてて、あとからくる連中のめじるしにする。そうやって集まったり散ったりしてさがすわけです。水牛はゆつくり歩くと、走るとき、曲がるとき、それぞれ重心のかりかたがちがうから、足跡もかわってくる。たとえば走るときは、地面をつよく蹴るから、足跡もふかくなるでしょう。それを手がかりにして、どこまでも追いかけるのです。

この先発隊のあとを、おくれた五十人が木



の葉をたどつて追いかける。こちらは速いから、すぐに追いつく。そして先発隊がパテてきたら、それと交代するわけです。泥棒のほうは、たとえばある部落までくると、水牛を売っちゃう。リレー式に売っていく。だから追いかけるほうは大変です。それでゴハンと水がいるのです。

泥棒はなんとかして追跡者をだまそうとします。ふつうの道をさけて、タンボや森のなかを歩いたり、ひとに会うと、「この村の水

牛だよ」といったりします。牛車をひかせて、足跡を消すとかね。

それでも追いかけていく。歩幅をしつように計りながら、夜は足跡のうえに寝て、ゆくえを見失わないようにする。ふつうは泥棒をつかまえるまでに三日はかかります。百人も二百人もだから、ゴハンもなくなつて、草やバナナを食べる。そうやってトナリの県まで追いかけていく。牛泥棒はたいいてい二、三人ですから、みつかつてしまえばもうおしまいです。数がちがいます。銃なんかもつていても、なんの役にもたたない。追跡者のほうもくたくたです。半分ねむりながら、ピッコをひきひき帰る。そして隣村までくると、合図の鉄砲をうつのです。女たちはソレツとゴハンを炊き、お祝いになります。

いまはダメですね。こういうふうにはいかない。泥棒が車できて、牛をつんでいつちやう。だいいち、水牛がすくなくなつた。何百年ものあいだ、人間といちばん親しい動物だつたのに、鉄の水牛——ニッポン製の耕耘機にとつかわられた。農業をつかひすぎて、水牛のエサだつた草もなくなつてしまつた。したがつて、いま話したのは昔のタイの水牛棒の話です。おもしろかつたですか。

プミサクと魯迅

タウイープウォンさんに聞く

——タウイープウォンさんについては、ジツト・プミサクの親友で、ご自分でも詩をかいていて、プミサク詩集の日本版に「詩人ジツト・プミサク」という文章がおさめられている、われわれはその程度しか知識がないのですが。

——私は一九五二年、タイ政府が朝鮮戦争に派兵をきめたとき、平和運動をやっているタマサート大学を除籍されました。平和委員会の副委員長だったのです。そのあと、いくつかの新聞社ではたらい回していたのですが、一九五八年十月二十一日にサリットのクーデターがおきて、プミサクたちといっしょに逮捕され、ラートヤウ監獄におくられました。そこで法律を独学で勉強して、獄中で国家試験を

うけたのです。警官がならんでいるままで、四日間の試験をうけて合格しました。そのあとは新聞記者をやめて、弁護士をやっています。詩はずっとかきつづけてきましたけれど、詩集はありません。翻訳がおおいですね。ジャック・ロンドンのものとか、最近では『周恩来詩集』とか。周恩来については、こちらにはなにも資料がないので、中国に問い合わせるとか、苦勞をしました。

——ラートヤウ監獄では、農村出身の「囚人」たちとコミーニンをつくって、食糧を自分たちでつくとか、独創的な集団生活をおこなったときいています。獄中で、よくそんなことができましたね。

——ひとつには、知識人たちが大量逮捕さ

れて、みんながおなじ場所に押しこめられていたので、要求がだしやすかったこと。それにサリットのほうも、ただ閉じこめておきさえすればよかったのでしよう、裁判もなく、したがって正式の罪名もなかったのです。スタム君たち、十・六の囚人たちにくらべれば、たしかに自由がありましたね。スタム君たちはひどいめにあった。

——バンコックの本屋を歩いて、魯迅の小説集の翻訳を何冊も見かけました。『阿Q正伝』も二種類の翻訳がでていますね。

——魯迅はタイではかなり読まれています。ことしの九月二十五日は、魯迅の生誕百周年でした。それで私はちょっとした発見をしたのですが、ジツト・プミサクも一九三〇年

のおなじ日——九月二十五日に生まれているのです。そのことに気づいたので、私は魯迅とプミサクをならべて論じた文章をかいて、『文学世界』の編集部にわたしました。まもなく掲載されるはずですが。プミサクも若いころ、よく魯迅をよんでいたんですよ。かれの部屋のドアをはいったところに、魯迅の写真がかかっていたのをおぼえています。

ただ魯迅とプミサクとは最後がちがいますね。魯迅は病気で死にましたが、プミサクは武装闘争で殺されました。私個人としてはゲリラ戦はかれの体質にあわなかったと思います。かれはひどい近眼で、おまけに胃がわるく、いつも下痢をしていました。かれには生きのびてほしかった。だれもかれのあとにはつげません。これから五十年たっても、かれほど人気のある詩人はいないでしょう。

——詩が大众的によまれるというのは、日本では想像がつかないのですが、タイではふつうのことですか。それともプミサクの場合だけなのですか。

——タイ人がとくに詩が好きだということはないと思います。ジツトの詩はわかりやすいのです。かれは意図的に大衆的なことをばっかりつかっていたのですから。プミサクや私の

世代以前——一九三〇年から五二年にかけては、詩はまったくかかれなかったといってもいいほどのです。詩人もいなくなりました。そうです。文学の主流は小説であって、詩ではありません。もう私は旧世代なので、確信をもつてはいえないのですが、十・六以前の若い人たちの小説はどれもおなじようなテーマで、どれがいいのか、よくわかりませんでした。いまようやくラクラット・ポンファイプーとか、すぐれた若い作者たちがあらわれつつあるようです。

——タウイープウォンさんは弁護士だけでなく、詩人で翻訳家でもあるわけですね。演劇にも関係があるし、タウイープウォンさんが詩をかいて、プミサクが作曲した「人権のマーチ」という歌もある。プミサク自身がそうだったわけですが、タイの知識人というのは、たかさんの領域のしごとをいちどにやる伝統みたいなものがあるんですか。

——必要がそうさせるのですね。私のことでは、私にとくべつの才能があるとは思えません。そうせざるをえない必要があるから、弁護士をやり、ほかのことも同時にやるざるをえないのです。それというのも、ひとがいなからです。十・一四の学生革命のあ

とでさえ、卒業した学生たちは就職すると高い地位に就いてしまっただけで、民衆のためのしごとから離れてしまっただけで、それで少数の人間がいろいろのことをやらなければならなくなるのです。就職してからも、いままでもやってきたことをやりつづければ、必然的に多方面のしごとにかかわる結果になりますよ。

——タイの現代演劇についてきかせてください。お兄さんのラフイートさんは劇作家だとききましたか。

——ヨーロッパ的な意味での現代演劇は、タイでは一九四五年から五二、三年ごろまで、七年か八年のあいだ存在しただけです。兄とその仲間がやったわけですが、観客がすくなく、お金がかかる。それに政治的な問題はあつかうことができないので、大きな運動になるまえにつぶれてしまったのです。一九五一年のピブンソクラムのクーデターするとき、兄はクーデターを諷刺する芝居をかって弾圧されました。

その結果、劇場は映画しかやらなくなり、スラシット・サタヤウォン、ソー・アチャナチュンダ、スパン・プラピブン、ラタナボン・インカラカチュンといったすぐれた俳優たちも、映画にいつてしまっただけで、いまのタイには学

学生演劇しかないといつてもいいと思います。——タイの学生たちの運動では、女性たちがたいへんがんばっているような印象をうけました。とてもいきいきしています。

——中国にくらべればまだまだですが、三十年まえにくらべると、ずいぶんちがっています。三十年まえというと、セーニー・サウワポンの『妖魔（ピーサート）』という小説でかかっているような状態ですね。それにくらべると、女性の進出はめだっています。プミサックにも、「タイ女性——過去・現在・未来」という文章があります。女性解放のための先駆的なしごです。日本の人たちにもぜひ読んでいただきたいですね。

——プミサックの未発表の詩や文章が本になっっていますね。全集のようなかたちで、これの仕事をもとめる計画はないのですか。

——いまのところはありません。社会科学研究所のような大きな組織がうごかなければならないのですが、見とおしはゼロです。

編集後記

在校生にくる途中で高田馬場の本屋をのぞい

たら、『アリス・イン・レッド・チャイナ』といったタイトルの大きな写真集が平台にっんであった。

ポカポカした表情の三人組が、小さな工場ぐらいの音響や照明の機械をもって、中国大陸に上陸した。コンサートにあつまった人民服の若者たちのやや呆然気味の顔・顔・顔が、たくさん写っている。それでもアリス君たちとしては、結構、ニッポン武道館で黄色い娘たちにかこまれたピートルズの気分だったのだらう。そうか、こいつらはバンコクでも、自国のエレクトロニクス産業の威圧的な力にささえられて、こんなふうにあメリカ人ごっこをやってきたのであったのか。

かれらは一年ほど前に、タマサート大学でギンギラギンの野外コンサートをやった。そのスタイルが、いまのタイの学生バンドに影響をあたえているらしいというのが、水牛楽団の何人かのメンバーの意見だった。おたがいの質をたしかめつつ、ほそぼそとつづけるコミュニケーションではなく、力まかせに押しこむ関係のつけ方——それがいやで、とうとうアツオくんは自前のでかい声すらいやになっってしまった。
かわいそうに。

購読の御案内

*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

*申し込みと送金は郵便振替（口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二）または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということをお明記してください。

*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信

第三巻第十二号
一九八一年十二月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154 東京都世田谷区新町2-15-13

八巻方

電話〇三（四二五）九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ